

僕が今この文章を書いている東京藝術大学上野キャンパスの様子は、不気味なほどの静けさを湛えている。言うまでもなく、その原因は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な大流行である。現在では感染予防策を講じながら少しずつ展示を再開する美術館やギャラリーも出始めてきたが、3月から5月にかけては、ほぼ全ての文化施設が閉館に追い込まれた。2020年6月22日の朝に朝日新聞デジタルに掲載された記事によると、この日の時点で世界全体の死者数は46万5880人に上る。厚労省のデータ（2020年6月21日正午時点）では、日本国内の感染者数は1万7864人とされている。

すなわち、われわれ人類は、いまだにコロナ禍の真っ只中にいるわけだが、気が早いのか、頭の切り換えが早いのか、すでに巷には「アフター（ポスト）コロナ」や「ニューノーマル（新しい生活様式）」を語る言葉が溢れている。現代アートの文脈においても、様々な媒体でオンライン展の可能性を論じるアーティスト、キュレーター、美術批評家の数が増えている。そうした議論では、新たな鑑賞体験の誕生を期待し、コロナ禍という危機をチャンスとして捉える論調が支配的である。こうした現象と裏表の関係にあるのが、オンライン展の限界を提起する言説である。そこでは、主として芸術鑑賞の文脈でオンライン空

間の限界が指摘され、作品体験における身体性の代替不可能性が強調される。

当然ながら、これらの議論（すなわち、オンライン展の可能性と限界）は重要なものであるが、ここでは少し異なる角度から現代アートのオンライン展について考えてみたい。「Alter-narratives-ありえたかもしれない物語-」展には、オンライン展の新しい可能性が実験的な仕方で散りばめられているが、それはほかの論者のみなさんが洞察力に満ちた観察眼で発見してくださるだろう。そこで、僕はオンライン展の「反」可能性という視点を提示したい。これは「不」可能性や「非」可能性（これらはともに「限界」のバリエーションである）とは違う。

具体による「国際スカイフェスティバル」（1960年）に見られるように、芸術は「制約」を「創造」へと変える特殊な回路を生み出すことを得意としている。（ややステレオタイプ的なイメージではあるが）ゴッホやゴーギャンに代表されるように、歴史的に困窮した生活を送ることが多かった芸術家のサバイバル術とでも言えるかもしれない。あるいは、「制約」を乗り越えよう（ゼロにしよう）とするのではなく、あえて最大化してみることも芸術ならではの発想かもしれない。「欠点を活かす（take-disadvantages）」ことから生ま

れる可能性——それをここでは「反」可能性と呼びたい。

「オンライン展の最大のアドバンテージは何か？」と聞かれれば、多くの人がアクセシビリティの高さと半永続性に言及するだろう。すなわち、フィジカルに開催される展覧会に比べて、時間と場所の制約を越えてより多くの鑑賞者が訪問することができるというわけだ。この点に関して、「Alter-narratives」展では、そうしたオンラインならではの利点が見事なまでに活かされて「いない」。あえてフィジカルな展覧会と同じように開催期間を設けることによって、ともすれば緊張感を失ってしまうかもしれないオンライン展の強度がドラスティックに増している。わずか1ヶ月でウェブサイトをクリックするというキュレーターたちの決断は、こうしたオンライン展の「反」可能性から考察されるべきであろう。インターネットという、すでにたくさんの「アントレプレナー」たちによって掘り尽くされた鉱脈の最後の輝きが、そこには隠されているように思われる。